

東北芸術工科大学 デザイン工学部

# 建築・環境デザイン学科 年報2020

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2020



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY  
OF ART & DESIGN



## はじめに

---

東日本大震災から10年という節目を間近に控えた2021年2月13日深夜、福島・宮城の県境を震源とする震度6強、マグニチュード7.1の地震は、東日本大震災の「余震」と報道されました。この「余震」は、10年という歳月が、被災者と被災地の傷を癒すために費やした膨大な時間であると共に、およそ46億年という地球の時間スケールでは、ほんの一瞬であるということに気づかされました。そして、本稿を執筆している2021年5月、天気予報等で「平年並み」「平年に比べ…」と、よく耳にする平年値が10年ぶりに更新されます。年平均気温の平年値は、全国的に0.1～0.5度上昇し、降水量の平年値も、夏の西日本や秋・冬の太平洋側の多くの地点で10%程度多くなります。地球の時間スケールの僅か10年で、自然環境は激変し、耐え難い気象現象、自然災害が「平年」という表現に上書きされるのです。一方、新型コロナウイルス感染拡大により、工場の操業が一時ストップし、航空機を中心に交通量が大幅に減少したことで、大気汚染が一時的に改善されました。皮肉にも人類は、コロナ禍を機に「環境か、経済か」という二項対立から発想を転換し、「環境に配慮した経済再生」という進むべき道に気付かされたように思います。本学科が標榜する「人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン」に、この世界的危機をクリエイティブに乗り越えるための答えがあるのではないのでしょうか。

未だ収束が見えないコロナ禍において、対面演習とオンライン講義の併用による「ハイブリッド体制」で2021年度はスタートを切りました。一日も早い収束を祈りつつ、物理的な距離を超えたオンライン授業は、暫定的なものとしてではなく、新たな日常の展望を示唆しています。

今年度の年報では、新たな日常の創造過程の記録として「ハイブリッド体制」に帰結するに至った、コロナ禍の教育現場について特集します。2020年度のオンライン授業の構築及び新入生への対応、オンライン演習による作品表現の可能性の広がりについて振り返ると共に、学生の声を記録しました。

また、本年報の台割を練るなかで、本学科の最たる特色と言えるプロジェクト活動継続の課題が浮き彫りになりました。これまでの手法を改めて見つめ直し、適宜オンラインコミュニケーションツールを活用することで、プロジェクトを推進していく新たな活動スタイルに転換していく局面にあるように感じます。

本年報の編集作業が、今後の学科活動をアップデートする契機になるでしょう。

(佐藤充)

## 目次

---

### 特集

---

今回の特集記事は、「新型コロナウイルスで変化した教育」について取り上げます。大学施設が閉鎖し、リモート授業を新たに構築した際の記録、ZoomやTeamsといったアプリケーションの導入による学生とのコミュニケーションの変化、そしてリモート演習による作品表現の変化について本学科教員による記事と、各学年の学生インタビューによりまとめました。

本特集から新型コロナウイルス感染拡大がもたらした、新たな教育と学生生活を振り返りその課題を探ります。

---

新型コロナウイルスで変化した教育	6
新型コロナウイルスで変化した教育 学生インタビュー	10

---

### 教育報

---

年度毎に、演習課題を中心とする教育の成果をまとめています。

1年生では、前期にデッサンや造形の基礎、単純な幾何学形態を展開し空間をデザインする演習を、後期に設計の基礎となる図学・製図やCADの習得、施工体験といった演習を設定しています。

2年生は、木造軸組構造から成るタイニーハウスの設計を通して木造建築の構造の基本と応用を学ぶ演習から始まり、続いて建築や環境をデザインする上では欠かせないフィールドワークについて学びます。後期には、住宅とその周囲に展開するランドスケープを続けて設計し、建築とその周囲の環境を一体的に計画します。1年を通じて建築と環境をひとつながりのものとして総合的に考える課題を設定しています。

3年生は、2年生での総合的演習を踏まえ、各自の興味や関心、進路に併せて演習課題を選択します。建築、ランドスケープ、都市や集落の研究、そしてそれぞれの領域を横断する内容の課題を設定し、地域の様々な問題に目を向け提案につなげてゆきます。

---

1学年	建築・環境基礎演習 インテリア基礎演習	12
	建築・環境施工演習	13
2学年	タイニーハウスの設計 フィールドワーク入門	14
	住宅の設計 住宅のランドスケープデザイン	15
3学年	エコタウンの設計	16
	リノベーション演習 市街地計画 農村計画	17
	ポストコロナの建築 ドイツ・山形の都市分析と サステイナブルプランニング	18

---

地域社会の核となる機能を擁した図書館 ランドスケープ総合デザイン	19
-------------------------------------	----

プロジェクト 早戸温泉環境整備実習 環境	26
-------------------------	----

プロジェクト 湯野浜温泉 リノベーション エリアリノベーションプロジェクト	27
--	----

各種講演会 西澤高男准教授特別講義	27
-------------------	----

環境的未来型 馬場未織氏	28
環境的未来型 秋吉浩気氏	
ワンデイプロジェクト 山代悟氏	

コンクール等 受賞者の紹介	JIA東北建築学生賞 「アフターコロナの世界」コンペティション 芸術工学会奨励賞 建築新人戦 せんだいデザインリーグ2021	29
------------------	--	----

執筆活動	研究者が本気で考えたゼロエネルギー住宅 テンポラリーアーキテクチャー	30
------	---------------------------------------	----

## 研究報

学生生活の集大成となる卒業研究・設計、修士研究を通して、社会の様々な課題と向き合い提案された研究成果をレビューします。

併せて、本学科の特徴である各研究室や学生・有志による地域と密着したプロジェクトについて、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、例年のような活動が出来ない状況のなかで、活動継続の糸口を見つけ出し、得られた成果を掲載します。

また、学科で主催した各種講評会や出版、執筆活動、学生たちの学外でのコンペティションで得た評価等について掲載します。

卒業研究・設計	建築廃材からなる木質チップの エネルギー利用システム	20
---------	-------------------------------	----

	言葉から生まれる空間 歩行者優先の都市空間の形成	21
--	-----------------------------	----

	住宅の平面構成に関する研究 タイニーハウスの可能性	22
--	------------------------------	----

	総評	23
--	----	----

修士研究	災害復興において被災者の精神的な癒しを 形成する環境改善方法に関する研究 ニュータウンのリデザインのための 街路網パターンの特性に関する基礎的研究	24
------	--	----

プロジェクト 地域との連携	鮭川村空き家活用推進 旧牛潜小学校再生プロジェクト 只見駅周辺魅力化向上事業	25
------------------	--	----

	大江町文化的景観建築実測調査	26
--	----------------	----



新型コロナウイルスで変化した教育



コロナ対応全体の話と教育の新規構築

2020年度、前期は全ての授業がリモート型でスタートし、後期はリモート型と対面型のハイブリッドでの実施に移行した。当初、事前準備の間もなく、全ての授業をリモートで対応できるのか、教員も戸惑いがあった。当然だが、誰もやったことがなかったからである。大学全体でいうと、美術系の学科が特に対面型の演習を求めているが、それは本学科も同じであった。

リモートでできること、対面でしかできないことはそれぞれあった。リモートでの授業を経験したことで、より対面の重要性を理解することができたといえる。対面で会って話すということは、相手の感情の機微を感じることができる。経過を説明する態度、顔色、言葉のもつ情報量は実に多い。学生ごとに何をどこまでできるか解釈しながら、指導を進める際に無理が効くかどうかを見極められる。特に前期は、いつまでどうなるかわからないという不安が教員・学生ともにあったが、どんなメンタル状態かを把握することが難しかった。

さて、リモートの良さもある。現地に来なくともオンラインで繋がることのできるため、遠隔地と結んでの多くの交流が可能となった。後期の演習では、ドイツ在住ASOBUの永井宏治氏（本学科OBで卒業後渡独、現在は環境的政策の策定等に関

わる都市計画家）に、ドイツからリアルタイムで講師として参加いただいた。その距離よりも繋がっている感覚が、演習の成果を生き生きとしたものになっている。また、年2回実施している学科の特別講演会「環境的未来型」では、南房総リパブリックの馬場未織氏、VUILDの秋吉浩気氏を講師に迎え、「都市と地方は、生かしあえるのか。」「デジタル・ヴァナキュラー」というコロナ禍においての興味深いテーマで講演をいただいた。オンラインの機会を使い広く一般にも公開したことで、質問の幅が広がり、学生にとっても有意義だったと言える。

学生はデジタルネイティブ世代ということもあり、すっかり慣れたように見えるが、対面での学生同士の交流は、大学生活を過ごしていく中で必要不可欠なものだと改めて感じた。一方、リモートの授業は動画として残しやすいという性格もある。今までは大学生のためのものだけであったが、社会人教育（リカレント教育）に広げて使える可能性がある。人生長寿化していく中で、大学が最終の学びの場であるという時代はとうの昔に終わっている。アート思考、デザイン思考は、社会人にとっても有意義なものである。大学が地域社会にシームレスに繋がっていくことが、大学にとっても地域社会にとっても求められているのではないか。（竹内昌義）

	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
例年			春季休暇 修了研究・制作展 卒業	卒業式	入学式 新入生交流会			環境的未来型	夏季休暇		芸術祭	ワンデイプロジェクト	環境的未来型	冬季休暇	修了研究・制作展 卒業	卒業式
	前年度後期授業				前期授業							後期授業				
2020年度			COVID-19が発見される 春季休暇 修了研究・制作展 卒業	山形初の感染者が出る 2020年度卒業式中止	入学式中止 新入生交流会	リモート授業用資料の送付 リモート授業用資料の準備 トライアルオンライン期間 新入生交流会(リモート)			学修振り返り期間 環境的未来型(リモート) 夏季休暇	新入生交流会(対面)	芸術祭中止 2020年度卒業式(リモート) 新入生歓迎の集い	ワンデイプロジェクト (リモート・対面)		冬季休暇	修了研究・制作展 環境的未来型(リモート・対面) 卒業	山形初の緊急事態宣言 2020年卒業式(学生のみ)
	前年度後期授業					前期授業(完全リモート)						後期授業(講義/リモート・演習/対面)				

年間スケジュール（例年と昨年度の比較）



Teamsによる情報共有と講評

### 新しいツールの導入と学生とのコミュニケーション

2020年が明けた頃から未知の肺炎のニュースが出始めていた。そこから一気に世界同時多発で状況が悪化し、国内でも人流の抑制と活動の制限（自粛）が始まった。学校と呼ばれる小・中・高、そして大学も教育サービスは対面を基本とすることから対応に苦慮した。比較的に通信環境が整っていた大学は、オンラインによるリモート授業運営を手探りながらも構想し実行に移すことができた。回線やツールの問題が大学側にも学生側にもあったが、進みながら問題の具体を見つけ改善する他は無かった。必要に迫られて始まったリモート授業ではあったが、様々な利点や授業の本質に気が付く機会となった。本稿では主に本学科で取り組んだ授業に関するツールとコミュニケーションについて報告する。

本学ではリモート授業のメインツールにZoom社の「Zoom」を位置づけた。オンラインにより映像と音声に参加者が共有できるシステムで、企業の会議等で利用されていた。類似のサービスは複数あるが、比較的に安定したシステムだと云われている。既存の学内インフォメーションのプラットフォームである「東北芸術工科大学NETBUS」で各授業の仮想教室（Zoomミーティング）のURLを案内し、学生がアクセスする仕組みである。もう一つ頻繁に利用されたアプリケーションがMicrosoft社の「Teams」である。チームを編成すればオンライン上での資料の提供や課題の提出、その延長で発生する関連の対話（投稿と返信、チャット）を1つに束ねて行うことができる。これらのツールは、学科と学生を縦（教員—学科準備室—学生）と横（各学年ごと）につなぐ役割として事務連絡的にも機能した。

大学教育は、提供する情報は最新であっても、対面授業では資料を提示しながらそれについて説明するか、受講生から意見を引き出すか、学生同士の対話を求めるスタイルが多い。提示する資料こそデジタル化されていても基本のスタイルはアナログで古典的であった。この古典的な対話がとても重要であるこ

とを後に改めて確認することになるが、オンラインで新たなるツールを利用することで、授業におけるコミュニケーションに様々な幅やグラデーションが生まれた。例えばZoomでは、小部屋を準備し少人数でのディスカッションが可能だが、瞬時に人の組み合わせを入れ替えることができるため、対話の機会を増やすことができた。また演習等での学生によるアイデアや研究成果のプレゼンテーションでも、資料を画面に提示し、参加者全員が自身のPC画面でそれを詳しく見ることが可能であるため、会場の空気で盛り上がる対面発表とは違う、よりコンテンツに集中した情報の授受が行われた。さらに演習によっては、作業の途中経過を頻繁にTeams掲示板に情報提示してもらい、各自の進捗と内容を共有することで、集団で同じ課題に取り組むメリット（様々なプロセスや解を同時に知ることができる）を最大化しつつ、自身が学びの過程（全体の進捗）のどの位置にポジションするのかを分かりやすくした。これらは教員の解説を必要とせず、各学生が情報を共有することで可能となる間接的なコミュニケーションであった。また、演習の運営がデジタル化されたことで教員の作業効率が改善され、学生へのフィードバックのスピードや頻度も上がったほか、タイムリーな質疑応答がし易くなるなど、授業全体がブラッシュアップされた。

半年を経て2020年後期からは、引き続き講義科目はリモート授業とし、演習科目は対面授業に切替わった。インドア志向の学生にとってはフルリモートが心地よかったようだが、多くの学生の声を聴くと1人で部屋にいることは周りが見えず不安が募るばかりか、大学に通うことで生活や学修のリズムが生まれていたという。やはり集まって対面で学ぶことは、古典的でありながら個人では得られない体系的な学びがあることを深く理解した。一方、教員はリモートとデジタルの利便性も十分実感した。後期はそれらも引き続き利用し、より多面的な学びのシーンを作る実験を続け、今も教育を進化させている。（渡部桂）



Zoomでの演習風景（1年生）





Zoomを使った授業の様子 (上)

1年生へ送付した演習スターターキット (中)

TeamsとZoomを併用した講評会 (下)

## 1年生への対応

2020年度入学の1年生は入学式が見送られ、代わりのセレモニーも秋口となった。学科同級生との実際の対面も後期が始まってからであり、前期は大学の詳しいことは何も分からないままに全ての授業をオンラインで受講したことになる。2年生以上は大学の空間性や空気感を大きな共通の下地にすることができたため、暗黙での世界観の共有があった。それが無い1年生は大きな不安を抱えていたことは言うまでもないが、授業を運営する教員にもその不安を想像した不安があった。そのため全学的に1年生に対する個別面談を丁寧に行い、授業以前の体制づくりをしっかりと行った。

講義科目は、多くが「Zoom」を利用しながら教員が講義するスタイルで進められていった。オンライン接続に問題がなければ講師と聴講者の関係で授業は進んでゆくことになり、特別な複雑さはないが、それでも当初は「Zoom」接続のトラブルなどが多発したため、全てが初めてである1年生に対してはインターネット接続環境にも配慮しながら授業を慎重に進めた。時には設備に関する状況も詳細に確認し、不足があれば大学が準備したWi-fiルーターの貸し出し手続きのフォローなども行った。

授業開始前から大きな課題となったことは1年生の演習科目のスタートアップである。演習は通常、手を動かして絵を描きながら構想したり、図面を描いたり、模型を制作したりするが、これを未経験者がリモートで行うには入念な準備を要する。2年生以上は勝手知ったる状況であり、必要な資材等を各々が入手すれば準備が整うが、様々な混乱が予想される1年生に対しては前期で利用する模型資材等一式を準備し発送することになった。クロッキーブックや建築模型に利用するスチレンボードは面的なものとして大きさを揃えて梱包できたが、中には建築模型の軸材である桧角棒などもあり、これらを他の資材に同梱できる寸法に切断し、梱包・発送するなど手間をかけ1年生の不安の払拭に努めた。

演習の準備が無事に整い、後は演習の運営である。各演習の報告にも重なるが、1年生では特にコミュニケーション量を増やし孤独ではない空気を醸成することに努めた。前期ではZoomでの少人数ディスカッションの機会を設けることやTeamsでの情報共有を頻繁に行った。後期では対面演習が可能となったため、感染対策に配慮しながらグループワークで横のつながりを強化することに配慮した。無事に交友関係は育ったようである。(渡部桂)





制限された環境下では、技術だけではなく表現の個性も磨かれた

### 表現の広がり と今後の展望

新型コロナウイルスが大学教育に与えた影響は大きい。学生たちは、時間と空間を共にし一緒に学び考えることの大切さ、そして喜びを改めて感じただろう。しかし同時に、この状況が新たな表現や学習手法をもたらした。それがデジタル技術の積極活用だ。

対面指導が困難で、模型やスケッチでのコミュニケーションが難しくなったことを補うために、CG、動画編集、オンラインプレゼンテーションなどデジタルを駆使した課題提出を学生たちに要求した。最初はうまくいか不安ではあったが、実際チャレンジしてみると、デジタルジェネレーションの学生たちはごく自然に、そして楽しそうに新たなツールを使いこなし、私たちの想像を超えたアウトプットを繰り出してきた。中には自らの表現の可能性に目覚めた学生もいた。これは本学科の教育に於いて大きな成果だった。

また、リモートでの授業が可能になったことで、遠隔地からの実況中継的な授業や、チャット機能などを活用し、レクチャーの最中に質問や意見を書き込み、それに先生が即座に答えていくような双方向性の高いやりとりが可能になった。対面の物理的なライブ感の欠如を補うことで、逆に学びあうための新たなコミュニケーション手段が生み出されている。

このような新たな展開は、地方都市の大学であることのメリットをさらに生かすチャンスであると捉えている。

リモートやデジタル化により、さまざまなレクチャーや映像などでの知識の習得が容易になったことで、情報の地域格差がなくなっている。さらに本学の強みである、自然や街に身近に触れ、生きた環境の中で学び、机上だけではないリアルな体験ができることが組み合わせれば、可能性がさらに広がる。

環境が急激に変化する中、社会や企業が必要とする技術や人材もまた変化する。それらに柔軟に対応すべく、今後もチャレンジを継続する。

私たちは急激に進むデジタル化を追い風にしながら、地域にしっかり根を下ろした教育と思考と行動を両立することを今後もさらに追求したい。(馬場正尊)

## 学生インタビュー 新型コロナウイルス感染対策によって変化した学生生活

完全オンライン授業で大学生活を迎えた1年生、演習スペースが与えられ本格的に制作活動が始まるはずだった2年生、設計演習やプロジェクトがオンラインになった3年生、大学生活の集大成と言える卒業研究・設計をオンラインゼミで行った4年生。

それぞれの学年の学生に、学生生活がどのように変わり、そこから得られたこと、また見直すべきことなどをインタビューした。

インタビュー参加者

- 1年生（現2年生） 青山エマ（以下：青山） 加藤将宗（以下：加藤）  
2年生（現3年生） 遠藤悠（以下：遠藤） 勝又なつほ（以下：勝又）  
3年生（現4年生） 小野葉月（以下：小野） 根岸楓（以下：根岸）  
4年生（卒業生） 梅澤一燈（以下：梅澤） 安部美希（以下：安部）



現2、3、4年生の対面インタビューの様子



不安を抱え大学生活をスタートした現2年生

—1年生（現2年生）の皆さんは入学式の中止、完全オンライン授業という状況で大学生活がスタートしましたが、オンライン授業や友人関係を築くことについて当時、どのように感じましたか。

加藤 大学生活がオンライン授業で始まったので、それが当たり前だと思っていました。オンライン授業であればどこでも授業を受けることができたので、後期からの対面授業に慣れるのが少し大変でした。

青山 入学前からプロジェクトに入りたいと思っていましたが、コロナの影響で参加出来なかったことや、授業中、先生から「遠慮なく質問していいよ」と言われても、なかなか質問が出来ず、ストレスを感じることがありました。友人関係については、入学準備プログラムで仲良くなれた友人と会えないことが残念でした。

加藤 私たちは、AO入試だったので、入学前に友人が出来ていましたが、そうでない新入生は、半年間、学内に友人がいない状況でオンライン授業を受けていました。対面授業がスタートして初めて会う人が多かったです。—今年の1年生は対面で演習を受けています。それを見て当時を振り返ると、どのように感じますか。

青山 今の1年生は、みんなでデッサンしているのがうらやましいです。私たちは、自宅の部屋に籠って部屋を俯瞰した絵を描いたり、身近にあるものをデッサンしたりしました。オンラインで教えてもらっても理解が難しいこともあって、当時は、とても孤独でした。—オンライン演習だと周りがどんな絵を描いているとか、どのくらいのスピードで課題を進めているということを感じることが出来ないという辛さがあるということですね。一方で、Teamsでアップされた他の学生の作品をじっくり見ることができるとか、一つ一つの作品に対するコメントを聞けるというメリットはあったかと思いますがそのあたりはどうですか。

加藤 コメントを聞けるのは良いですが、やはり、実物を見ているわけではないのでそこは満足できなかったところです。

—2年生（現3年生）は、本来であれば各自の演習スペースが与えられ、そこで、友人と一緒に課題に取り組むことになるのですが、オンライン演習となり、軸組模型を自宅で製作していたと思います。先程、1年生から周りの作業の様子が分からず孤独だったという話がありましたが、やはり、自宅で演習するという点で、制作ペースが掴めないということなどありましたか。

勝又 構造のことを理解できていないところがあり、周りの人の製作状況が分からないことで、不要な柱を沢山作ってしまいました。今年の2年生の作品を観ると、課題を楽しみ制作しているのが羨ましく思います。

遠藤 私は、アパートで軸組模型を作りました。大きな模型だったので生活スペースに支

障をきたしました。材料が調達できないということも大変でした。

—1年生の時は、通常の対面授業でしたが、突然、オンライン授業になり、TeamsやZoomという今まで使ったことのないアプリケーションを使うことになりましたが、学校生活にどのような影響を与えましたか。

勝又 Teamsは情報共有やチャットで質問するという点ではとても便利なので、新型コロナウイルスに関係なく今後も活用したいです。Zoomは突然、ビデオをオンにしてくださいと言われると戸惑うし、全ての画面が自分を見ているように感じてしまうので、慣れるまでストレスを感じました。

—3年生（現4年生）は、オンラインでエコタウンの演習を行いました。模型ではなくCGでスタディや発表を行ったことについてメリット、デメリットを教えてください。

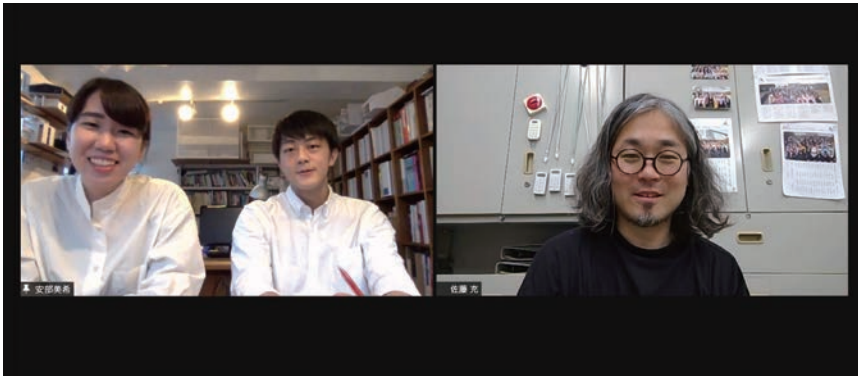
根岸 これまで模型で提出していたものが3DCADになることで、それに慣れるのに大変でした。また3DCADでオンラインエスキースを行うとネットワークの問題で接続トラブルが生じることが問題でした。

小野 3DCADは、模型よりも日射のシミュレーションができる点ではよかったです。し



対面での授業の大切さを実感した現3年生





Zoomによる卒業生オンラインインタビューの様子

かし、スケール感が掴めないことが問題だったように感じます。

—必要に迫られて3DCADを習得されたということですが、それによって表現のスキルは上がりましたか。

小野 これまでは、図面を描いて、模型を作って、パースを描いてと別々に行っていた作業が、3DCADで全てが一度にできるようになり、作業効率が上がりました。また、表現の幅が広がったと実感しています。

—お二人はプロジェクトにも参加されていますが、コロナ禍のプロジェクトはどのように進めていたのですか。

小野 私達は早戸のプロジェクトに参加しています。現地には一回も行けなかったのですが、Zoomで現地の人と状況確認などの小さな活動を続けてきました。今までは、年に1回の作業日のみに会っていた現地の方々と、2ヶ月に1回のペースでパソコンを通して会うことができるようになり、これまで知らなかった地域の状況を知ることができるようになりました。

根岸 いつもは作業をしに行き、現地の人と少し会うだけだったのが、リモートになり、「現地の人がどのような環境にしていきたい。」という生の声を聞くことができるよ



プロジェクト活動を地道に続けた現4年生

うになりました。

—プロジェクトは動かないけれど、プロジェクトの本質をしっかりと固めることができたのですね。今年の夏は、現地に行くのですか。

小野 今後の状況次第で検討する予定です。今は、活動が出来ていない状況なので、1年生の新メンバーを集めるべきか迷っています。—現地に行けなくてもZoomで現地の人と密にコミュニケーションがとれているので、プロジェクトを絶やさないとすることが大切ではないでしょうか。

—今後、コロナが収束し普通の学生生活に戻った時、講義や演習の進め方についてご意見あればお願いします。

青山 すべての授業を対面でやりたいです。加藤 私は、どこでも授業を受けることができるというのは利点だと思うし、時間を有効に使えるので、オンラインを継続し、演習のみ対面が良いと思っています。

遠藤 大学のシステムが上手く機能していない部分があると思っています。例えば午前中のオンライン授業から対面の演習までの時間が短く、十分な昼休憩や移動時間が取れません。勝又 教室移動の時間とか、お昼の時間とか、「余白の時間」が大切な気がします。オンライン授業は、効率は良くなりましたが、スケジュールを詰めすぎて「余白の時間」が無くなっているように感じます。

—卒業生は、大学最後の年がコロナ禍となり、卒業設計の進め方やゼミでの活動について感じたことはありますか。

安部 Zoomでのコミュニケーションの取り方にすぐに慣れることができたので、コロナ

だからといってゼミの活動が無くなったという印象は無いです。卒業設計の進め方は、私達も先生方も手探りの状態で、Zoomでは模型を見せて議論することが出来ず、例年よりも進め方が遅かったのかもしれない。

—お二人は、卒業制作展の学科の代表もされていました。本来であれば入場制限無く、多くの人に見てもらえるはずですが、それが叶わなかったことについてどのように感じていますか。

梅澤 卒業制作展を計画している時点で完全オンラインも視野に入れていたので、入場制限があっても直接見に来ていただけというだけで嬉しかったです。

安部 「人が観に来られない。だったら自分たちでまちに出よう。」という意見が出て、コロナがあったから「まちなか卒展」が出来ました。

—卒業制作展の各自の作品紹介のムービーは、なぜ作ろうということになったのですか。安部 企画している仲間からのアイデアで作ることになりました。半年間、大学で学べなかったから、例年よりももっと楽しもう！という気持ちがあり、作品紹介というよりも思い出をまとめようという想いで作りました。

—コロナがあったから、より良い卒業制作展にしようという気持ちが強くなったのですか。

—最後の質問になりますが、コロナの影響により大学生活でやり残したことや、コロナが落ち着いたらやりたいことはありますか。

安部 ウィルス感染が拡大する前は、ゼミの仲間とヨーロッパにゼミ旅行に行きたいと言っていました。ゼミ旅行に行ければ、もっと先生と話す時間が増えたと思うし、仲間とも良い思い出が出来ていたと思うと、それがやり残したことだと思います。

梅澤 ゼミ旅行は行きなかったのですが、コロナ禍によってZoomで多くの建築家がオンラインセミナーを行ったため、これまで得る事が出来なかった情報を得るための選択肢が1つ増えた時代に学生で良かったと思います。

学生へのインタビューから各学年のオンライン授業に対する感覚の違いや、情報発信・取得・共有の劇的な環境変化に順応する学生の逞しさを感じると共に、新たなプロジェクトの進め方の可能性、「余白の時間」の大切さに気付かされた。(聞き手:佐藤充)



## 1学年 建築・環境基礎演習

1年生が最初に取り組む演習である。今後の専門演習に必要なデザインの基礎知識に加え、描いたり模型を作りながら空間を考える基礎的な思考技術を身につける。最も重要な態度は事物をよく観察することである。そのために人・物・空間を描きながら観察し、身体と関係する物や空間のスケール感覚を身に付けることや、空間を模型化し力学的な成り立ちを体感的に理解するプログラムを準備している。しかし今年度はコロナ禍により演習がオンラインでの実施となった。技術的な解説のために手元をカメラで映し出し実演して見せるなど都合よいシーンもあったが、対面演習の良さである学生同士が互いの作業を見て自身の作業ペースや技術レベルを確認したり、技術を真似たりする集団の学習効果が働きにくく、理解や進捗のバラつきを懸念した。そのためTeamsを活用し毎回の演習成果を共有することに気を配り進めた。人物クロッキーを行うことはできなかったが、各家庭やアパートにある物や空間を活かしながらデザインを行い、事前を送付した資材により模型制作も行うことができた。無理をしない運営方針であったが、次の課題につながる準備を無事に整えることができた。(渡部桂)



演習成果（初めてのポートフォリオ）（上）  
立体造形からイメージスケッチへの展開（下）

## 1学年 インテリア基礎演習

1年生が最初に自ら空間を発想し、創造する演習である。基本的かつ抽象的な形状である立方体の内部空間と幾何学的な展開について、模型によって手を動かしながら考え、プレゼンテーションする。まず4畳半に相当する2.7m立方の「茶室」をつくる課題から始め、立方体に幾何学的な操作を施すことによって空間を変容させる課題、そして各辺の長さが2倍となる5.4m立方の空間を創造する課題へと段階的にサイズと抽象度を引き上げてゆき、空間のスケール感を習得するとともに抽象的な形態と具体的な空間との関係について考え、空間の分節や動線の挿入といった建築的操作にも徐々に慣れてゆくことを目指した。今年度はオンラインでの実施となったため、模型製作など技術的な到達度に不安があったが、学生たちの創意工夫により、これまでの対面授業での成果に勝るとも劣らない作品群が提示された。また、主として模型を撮影した画像でのプレゼンテーションとなったために写真撮影の技術も求められることとなったが、そこにも随所に工夫を凝らした表現が多く見られた。限られた条件下で何が可能か。学生たちの持つ柔軟さと真摯な学びの姿勢に、出題した側が感心させられた演習であった。(西澤高男)



2.7m立方で空間を考える（上）  
5.4m立方の空間に、分節や動線を加える（下）



本演習はフィールド型の演習で、本学科のカリキュラムにおける特色の1つとなっている。主として大学に隣接する悠創の丘の雑木林をフィールドとし、2カ所のエリアを隔年で交互に入れ替わりながら手入れを行う。その中で環境や素材に触れ、資源の存在に気がつくこと、それを材料として用いながら構造物の施工を行うことを通して素材の特性や材料の施工性を知ることが目的とする。

グループワークも大きな要素であり、演習の限られた時間の中で他者と協働しながら1人では構築できない構造物をつくりあげる。コロナ禍の状況においては、この共同作業が大きな懸念であったが、教員、学生全員が感染予防対策を意識高く十分に行いながらフィールドで活動を行った。また、前期がリモート授業であった1年生にとって、初めて学科同級生と対面交流する機会でもあり、グループワークを丁寧に進めることを意識した。

2020年のフィールドは大学本館の裏手に位置し、かつて農地であった段々の地形が特徴で、現在の地表は植林と実生の樹木が入り混じりながら里山の植生になっている。公園の一部となったこの場所に人が入ることを前提に、作業グループ毎に地形を読みながら園内の人の動きを想像した。杉の間伐材や広葉樹の枝を用いて人の誘導や空間の境界を示唆する柵や、落差のある地形の中の移動を補助する階段等を計画・設計・施工した。杉は公園の背後地である人工林で学生自らが間伐して得た材料である。広葉樹も園内の落枝や下枝を整理したもの、あるいは伐採したものである。学生は生きた樹木が資源とみなされ素材・材料となり、さらに物や空間ができる過程を肌身を持って体験し、実感した。(渡部桂)



演習序盤の現場風景（上） 演習終盤の現場風景（下）



1



2



3



4

#### 1 樹木の除間伐と草刈り

園内の見通し確保と地形の確認のため、支障木の除間伐と草刈りを行う。

#### 2 スギ人工林の間伐

スギ人工林で間伐を体験し、針葉樹の森の現状や、樹木としてのスギの特徴を知る。

#### 3 枝葉の分解

伐採した樹木を丁寧に分解し、枝は柵の材料に、小枝や葉は土に返す。

#### 4 柱に枝を編んで柵をつくる

地形や空間を読んで柵をつくり、人を誘い利用を助ける。それは風景の一部にもなる。

## 2学年 タイニーハウスの設計

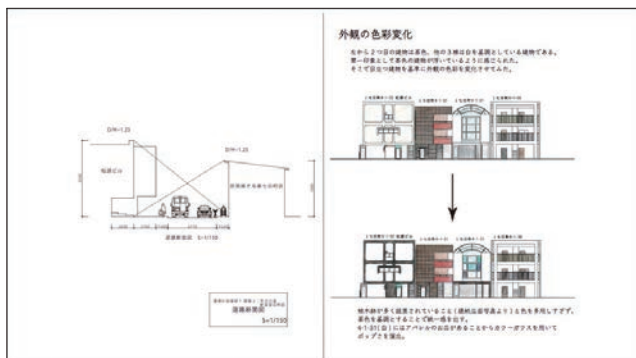
例年、各自に与えられた学科演習室のスペースで初めて設計を行う課題であったが、完全リモートでの対応となった。課題内容は、建築設計の第一歩として木造建築の基本である軸組構法によるタイニーハウスの設計である。床面積7.3m<sup>2</sup>の空間にどのような機能を当てはめるのかを考えて、敷地は学内の平坦な場所に限定して各自が選定する。また、部材をどのように組み合わせたら構造的に成り立つのかを意識しながら設計する必要があるため、その理解を深めるために1/10の軸組模型を製作する。インキングの方法は作成された動画を視聴し、CGのレクチャーや毎回のエスキス、講評会はZoomで行うという不自由な状況下であったが、しっかり取り組んでくれた。最優秀の石黒亜月の作品は、帰り際に友人ともう少し話をしたいという欲求に答える場であるが、選定した敷地の読み込みと動線や空間の設定が秀逸であるだけでなく、極めて精緻な軸組模型が目をつけた。李洗庭の作品は、椅子・床・テーブルの3つの部屋を限られた面積の中に設け、それぞれ床の高さや開口部の位置や開き方を変えて、さらに貫構造による透過壁面など、しつらえの工夫が随所に見られた点が評価された。(山畑信博)



最優秀賞 石黒亜月 (上) 優秀賞 李洗庭 (下)

## 2学年 フィールドワーク入門

本演習はその名の通り、建築、環境デザインの実務に求められる現地踏査、建築実測、記録やそのまとめ、報告書作成など様々なフィールドワークの手法、技術を実践的に体験することを目的とするが、前期後半期の7週間はコロナ禍の影響で屋外活動が制限される中、やむなく全てのカリキュラムをweb対応に限定し、建築実測は各自の部屋の計測作図、現地踏査は地図や航空写真、ストリートビューによる検証、スクリーンショットによる撮影記録などを駆使し、町並みの連続立面図、道路断面図作成、都市計画制限と立体利用の想定など主に山形市街を対象とした現状把握を中心にZoomによる指示、講評などで対応した。一方web全盛時代の若い学生たちは、都市に臨む鳥の目となる航空写真、蟻の目となるストリートビューなどwebツールをそつなくこなし、疲れ知らず、雨でも夜でも踏査実施可能というポジティブな発想から意欲的に課題をクリアし、例年にも劣らない成果を生み出してくれていた。「フィールドワークは無理」という大方の予想を見事に裏切り、オンラインの可能性を大きく実感した演習となった。(志村直愛)

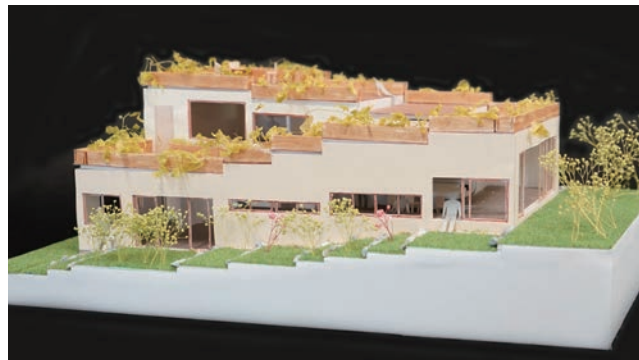


実測とWebツールより、空間の情報を得る



## 2学年 住宅の設計

大学近くにある住宅地を12分割して敷地を割振り、それぞれの敷地にあった住宅を設計する。敷地周辺環境、すなわち方位、周辺の建物、敷地の高さを読みながら、家族や住まい方のコンセプトを設定する。初めての本格的な設計課題としては要求する条件が多く、バランスよく全てに応える必要がある。ランドスケープの演習とも協働し、まずは敷地の条件を読み解いてから、住宅の設計に取り組む。建築は敷地条件に影響されること、逆にそれらを逆手にとって、こうでなければならない理由としたい。優秀作品は、初めての建築として優れたものであった。最優秀賞の戸田翼は、住宅内部空間の連続性を考え、スパイラル状に空間を配置し、周囲の土地の高さを勘案しつつ、敷地に開いていく案。優秀賞の渡部菜緒は、各自がそれぞれ独立した家族の関係を、独立したヴォリュームの関係で表す案。廣川琴美は様々な分析に基づき、リビングと個室の関係を図式的に解き、形にした案となった。この課題は住宅そのものを考えた後、住宅のランドスケープ、外部空間を考える授業に引き継いだ。(竹内昌義)



最優秀賞 戸田翼 (上)  
優秀賞 渡部菜緒 (下左) 優秀賞 廣川琴美 (下右)

## 2学年 住宅のランドスケープデザイン

今年度は新しい取り組みとして演習期間を2期に分割し、間に「住宅の設計」を挟んだ。敷地デザインの本質は後付け的な外構操作ではなく、建築の配置検討から始まるためである。前半は設計対象街区とその周辺環境を把握し、敷地の立地特性を読み込んだほか、各々割当てられた敷地での住宅配置の可能性を検討した。後半は自らが設計した住宅を与条件に敷地のデザインを行った。12の区画から成る街区中央には背骨のように共用の遊歩道を設定したため、各敷地に加えオープンな共用空間との接続もデザインの鍵であった。また街区が傾斜地に立地するため、レベルの調整や宅地間に生まれる段差への対応が必要であった。最優秀の近藤真椰は、滑らかな形状の木製テラスと小径が樹林の間を縫うような庭をデザインし、敷地の特性である傾斜地の魅力を引き出した。優秀賞の吉田紅葉は、しっかり構築された建築を植栽の背景として活かすことや、外から内部に階層を持つ空間の間を植栽によって有機的につなげてみせた。森山雅幸氏、工藤まい氏、佐々木愛奈氏が特別講師として指導に参加した。(渡部桂)



最優秀賞 近藤真椰 (上) 最優秀賞 吉田紅葉 (下)

エコタウンの設計は大学の近くの上桜田に土地を設定した。山形エコハウスから道路を挟んで向かい側、4周を道路に囲まれ南北に長い土地である。東西で接する道路は約3mの高低差があり、土地の高さをどう設定するかも学生に委ねられた。日射の取得が求められるエコハウスにとって、それぞれの住宅をどのように配置するか、またそこで育まれるコミュニティをどう作っていくかが問われる課題である。前年度から続く課題だが、今年はコロナ対応となり、前期は初めからフルリモートで始まった。教員、学生共に演習の授業をオンラインで行うのは初めての試みである。また、エスキース自体もZoomというオンライン会議の仕組みを使い、全員に共有された画面にコメントを書き込む方法で行われた。これまでは教員とそれぞれ学生との間でしか共有されていなかったコメントのやりとりも、全員が見ることが可能になった。自身の作品のみならず、他学生のプロセスや作品のことを深く知る良い機会になっただろう。提出物に関して、通常の模型を取りやめ、全てのアウトプットを3DCADソフトを使ったCGとすることとした。試行錯誤であったが、学生の頑張りのもあり、設計密度が濃く、表現にも優れた良い作品が多かったと感じる。

伊藤風斗の案は東から西に降りる、段差のある中庭を連続させ、南面採光も大きくとれる非常に上質な空間の作品である。鈴木雄大の案はそれぞれの建物のヴォリュームを分解し、それを組み合わせる操作をし、立体的な組み合わせをすることで、そのヴォリューム間の通り抜けや採光を改良しつつ、空間を作っていく案であった。太田晴子の案は建物自体のフットプリントを小さくさせ、1階レベルの自由度を増しつつ、2階にプライベートな日射の取れるスペースを作り出し、均等に配置する案であった。長谷川のかの案は戸建て住宅からというよりは、全体を大きな集合住宅と捉え、そのヴォリュームを設定し、その表面に凹凸を作ることで、建物の表情を作り出した。植栽の表現や空、あるいは点景などのあり方も、それぞれの工夫を重ね、個性が現れた秀逸な仕上がりとなっている。(竹内昌義)



優秀賞 伊藤風斗 (上) 鈴木雄大 (中上) 太田晴子 (中下)  
長谷川のか (下)



コロナ禍で移動や外出が制限されるなかだからこそ、改めて自分が暮らす家と、その周辺に目を向け、新たなアイデアとデザインでエリアをよりポジティブに変えていこうという課題。授業はすべてオンラインで行われ、プレゼンテーションも動画を含めデジタル技術を積極的に活用することを求めた。初めてづくしの実験的な演習となった。

学生たちはそれぞれの場所から、例えばスマートフォンで実況中継的にプレゼンしたり、写真とCGをコラージュして新たな表現にチャレンジしたり、この困難な状況を楽しんでくれたのではないと思うほど、豊かなアウトプットが並んだ。

その中で、太田晴子の作品は空き家と空き地の多い商店街に小さなデザインを組み込むことで風景を変えていく、リアルで説得力のあるものだった。また動画の表現が見事。伊久美佳穂の作品も、地域に残る産業の隠れた魅力を発見し、それをデザインで顕在化しながら美しい日常風景を、実写とスケッチの融合で表現したのが秀逸。

リモートとデジタルによる新たな学びと表現の貴重な機会となった。(馬場正尊)

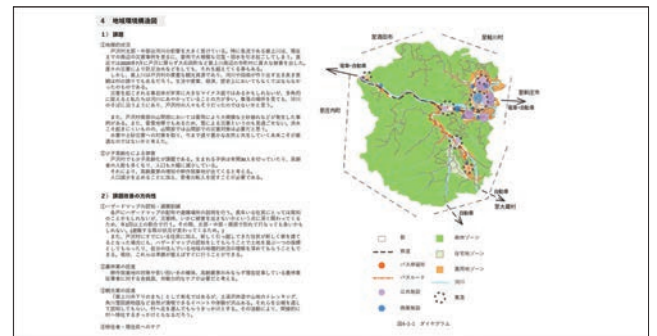


最優秀賞 太田晴子(上) 伊久美佳穂(下)



最優秀賞 穂積清加

山形市の中心市街地、十日町・三日町・八日町を対象として、都市の持つ魅力や問題点の発見から町のポテンシャルを上げる方策について提言する演習である。コロナ禍で外出制限が出される中、航空写真やストリートビューなどを駆使して在宅限定作業ながら各自実地踏査に負けない結果をまとめ上げることができた。穂積作品は、増えつつある空き家と駐車場、袋小路の特徴に注目し、子どもから高齢者まで様々な世代のニーズに答えた居場所づくりを提案した意欲的な作品である。(志村直愛)



最優秀賞 小野葉月

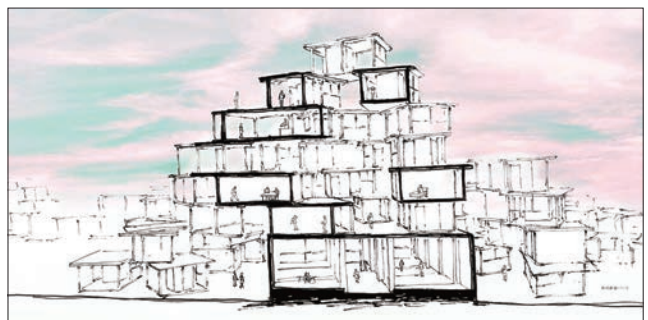
例年この課題では、現地でのフィールドワークを中心として行ってきた。しかし、今回は現地に行かずに地図情報GISを駆使し、地域を俯瞰的に調査する方法で演習を進めた。自然系の地図情報化として、山一川一田のつながりを表現した地図の作成、人間生活系の地図情報化として集落とまちの生活拠点となる様々な施設、公共交通等の地図の作成。これらの地図をもとに、地域の特徴と課題を抽出した。小野葉月は美しいグラフィックで戸沢村の特徴を明快に表現した。(三浦秀一)



3学年 ポストコロナの建築

「200人の学生が過ごす大学」というビルディングタイプで、「ポストコロナの建築」について考える演習課題を設定した。現在、世界の先進的な大学はキャンパスを持たず、プロジェクトベースで移動する。コロナ禍により対面とリモートのハイブリッドでの教育を経験し、大学という教育機関のキャンパスというリアルな空間、あるいは建築はどのくらい有効だろうかを考えた。そして山形市という地方都市でのその可能性を学生とともに考えたく、この出題とした。

作品の傾向は2つに分かれた。一つは学生の住まいからアプローチしていく方法。もう一つは大学の機能を分解して、町に溶け込ませる方法。草刈案はその両方の要素を持つ、音楽大学のプログラム。様々な楽器ごとに分かれたクラスタに小さな教室や寮が張り付いていくもの。一方の鈴木案は、細かいセルの連続で、明確ではない全体像にアプローチしていくもの。これら2つのアプローチの方法は対照的な案であったが、学生それぞれが現在向き合っている教育に対する期待や課題を表現する、異なるタイプの力作が多数あった。(竹内昌義)



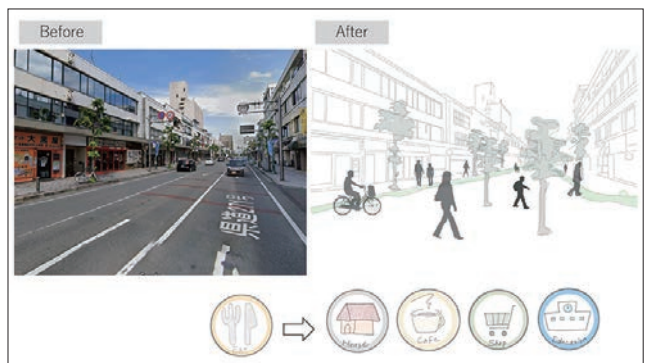
最優秀賞 草刈咲樹 (上) 優秀賞 鈴木雄大 (下)

3学年 ドイツ・山形の都市分析とサステイナブルプランニング

ドイツ在住のOB永井宏治氏を講師に迎え、ドイツの都市計画を学びながら山形市中心市街地の分析と提案を行った。演習の導入として、アーヘン工科大学教授のヤン・ポリフカ氏からはドイツにおけるインナーシティの変化、松百佳子氏から今後求められる公園・緑地デザインについてリモート講義があった。

演習の流れとしては、持続可能な都市の構成要素を考え、山形市中心市街地のSWOT分析、土地利用分析、そして山形市中心部を再生するためのミクスドユース構造とその実現を困難にする構造・経済・社会・法的障害を検討するという手順で進められた。調査は前期農村計画で習得したGISを活用しながら現地調査をスムーズに行うことができた。

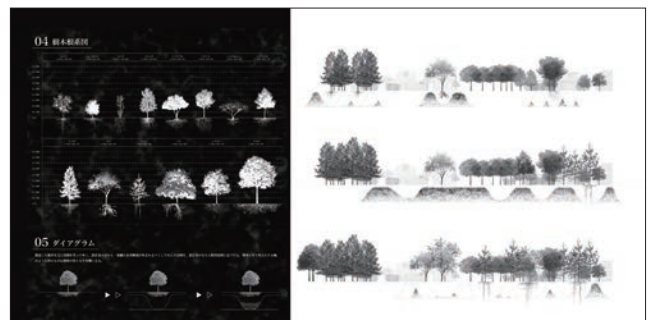
秋田花菜、渡邊翔、大坂明奈、河原彩乃のグループは、調査分析からヒューマンスケールの都市としての再構築を目指すこととし、歩いて暮らせるWalkable、近隣との関係を深めるContactableをテーマに、空き店舗利用、駐車場利用、歩行者空間の改善、バスルート変更など場所に依じた的確な提案を行った。(三浦秀一)



最優秀賞 秋田花菜 渡邊翔 大坂明奈 河原彩乃 (上・下)

### 3学年 地域社会の核となる機能を擁した図書館

近年、生涯教育や交流、地域活動等の拠点として変革しつつある図書館。卒業制作へとつながる3年後期後半の設計演習では、地域社会の核となる機能を擁した図書館の設計を課題とした。現在山形市立図書館のある場所を目の前に広がる小荷駄町公園も含めて一体的に敷地とし、隣接する南部公民館・体育館と併せて相互の関係についても考えることを求めた。今回は、図書館のあり方に対して積極的な提案を行い建築としてまとめ上げる提案型のグループと、提示された条件下での設計を適切に行う設計重視型のグループとに分け、設定した目標に向けた指導を行なった。そして今年度もSALHAUSの柘澤麻利氏にゲスト講師として隔週でお越しいただき、丁寧かつ適切なお指導を頂いた。最優秀となった村山綾音の案は、人の流れと溜まりとなる場所とに抑揚をつけ、民話をテーマとした多様な居場所を丁寧に設えた、完成度の高い作品。熊谷遥奈の案は既存の樹木を調査し、その根が干渉しない地中の空間として展開。良好な環境を周囲に提供している公園に建築を建てるという設定自体に疑問を持ち、課題や建築に対する「批評性」にこだわって独自の表現を生み出した意欲作であった。(西澤高男)

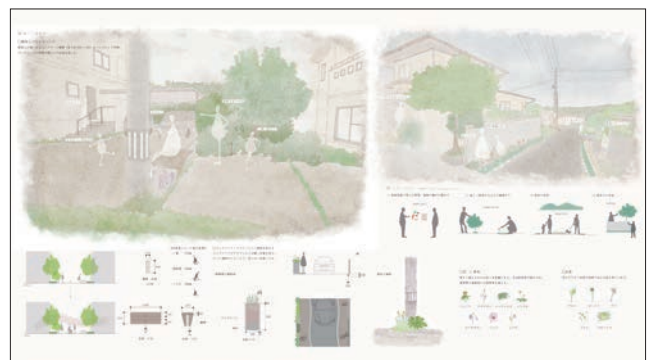


最優秀賞 村山綾音 (上) 優秀賞・柘澤賞 熊谷遥奈 (下)

### 3学年 ランドスケープ総合デザイン

本演習では、中山間地域にある集落の自然、土地利用、産業、歴史、文化等を階層的に読み解き、総合的な文脈として理解した上で課題やテーマを導き、将来の総合的な環境(ランドスケープ)の在り方をデザインする。調査を重視し、自ら発見・定義した課題に対する具体的なアイデアの提示が要点である。対象地は山形市郊外の岩波である。特別講師に廣瀬俊介氏を迎え、基調のレクチャーと講評をいただいた。

最優秀の平田珠里は、道沿いに発達した線形集落の風景を丁寧に調査し、石積みや植栽など既存の良さを活かしながらも、通り全体の景観的基調を整えることや、穏やかで瑞々しい集落の道に住民が佇み交流できる拠り所を調和的にデザインし提示した。同最優秀となった日山莉愛は、集落に沿って流れる竜山川に注目し、水や河畔林の美しい存在を、自然環境に負荷をかけない方法で体験するツールと仕組みと空間を果敢に提案した。学生各々が調査・分析、企画・構想、計画・設計の一連の作業を行うことで、半年後にはスタートする卒業研究の弾みとした。(渡部桂)



最優秀賞 平田珠里 (上) 最優秀賞 日山莉愛 (下)





建物は建てる時だけでなく壊す時にも環境への配慮が必要になってくる。建物を壊した時に排出される廃棄物の中でも、廃材からバイオマス燃料になる木質チップを製造することができる。現在山形県の施設では、廃材からつくった木質チップを再利用できるシステムがあまり普及していない。従って県内で建物を解体した際に排出された廃材から製造されたチップは県外まで運ばれ、再利用されているという実態がある。

そこで建物解体・分別→チップ化→運搬→エネルギー利用の一連の流れをシステム化することを目的として、木質チップを燃料とした小型バイオマス発電機を県内のどのような施設に導入し、自家発電するとどのようなメリットがあるのか、年間を通して電気だけでなく熱も利用する施設を対象に調査を行った。そしてそれらの施設で、エネルギーの需給バランスなどを分析した。木質チップと言うと間伐材が使われることがよくあるが、バイオマス発電をした場合、建築廃材は間伐材に比べ買い取り価格が低い。そこで今回の調査では売電ではなく、自家消費を行うことを仮定した。

調査から、温泉、温水プール、老人介護施設が導入に適しているという結果が出た。また導入することで施設側にも木質チップをつくる企業側にもメリットがあることがわかった。山形県内には各市町村に温泉などの施設が多々ある。県内施設に小型バイオマス発電機の導入が普及すれば、建物を解体し、そこから作られる木質チップをエネルギー利用するまでの一連の流れを県内でシステム化することができる。(新田ゆい)



卒業・修了制作展での展示パネル (上) 建築廃材木質チップ (下)

講評

新田ゆいは建築の解体木材の活用方法はないだろうかというところから出発し、エネルギー利用にたどり着いた。特に従来の大型バイオマス発電ではない小型のバイオマス発電を建築内に導入し、熱利用も行う新しいシステムの検討を行った。その検討対象となったのが、地元の温泉宿泊施設と温水プールである。両施設のエネルギー削減効果から、経済効果、二酸化炭素削減効果まで試算し、具体的な設備配置計画も検討した、熟度の高い提案となっている。結果として建築の解体木材は安価に入手できることから経済性も高く、山形県全域での展開可能性を示していることも大きな研究成果である。(三浦秀一)



優秀賞 言葉から生まれる空間

—歌集「木のかをり」から読み解く情景の空間化— 大室新

本設計で敷地となるのは、蔵王連峰など多くの山々に囲まれる山形県南陽市宮内地区。私の祖父が歌人として歌い続けてきたこの街の美しい情景を、祖父の短歌をまとめた歌集「木のかをり」を手がかりに、共有されてきた街の記憶や非日常的な出来事を見つめ、体感する記憶装置としての空間を提案する。

私たちは、日頃から本を読んだ時や写真を見たときに、空想や過去の情景を想像している。その小さな出来事の体験や、思考する瞬間の連続で、大きな内面世界のイメージを個々人が所有している。しかし、社会の変遷によって地域産業の原風景は失われ、街の風景は形骸化し、私たちの内面を彩る短歌のような一瞬の出来事は失われつつある。これは、短歌のもつ特別な空間を体感する建築であると同時に、空間を思考する多面的な行為から街の様子や関係性、「木」という存在がもつイメージや形としての暗黙知的な印象を引き出し伝える一つのプロムナードである。(大室新)

講評

製材業を営む祖父が記した歌集から、木材産業に関わる風土、歴史、継承されるべき暗黙知を考察・分析し、そこから得られた空間の情景価値を再解釈して、製材所、アトリエ、ギャラリーなどを配した複合施設の提案である。敷地は南陽市の中心部に程近いところであり、扱う樹種は広葉樹を中心とした地域の様相を反映し、構造は製材による木造である。平面計画は、歌集から得られた暗黙知の階層構造と短歌に含まれたメタファーやアナロジーを空間形態に写し、さらに情景にも及んでシーケンスを意識したものとなっている。このような大室新の地域に根差す木材業と祖父への想いが、精緻な模型・ドローイングによって表現された秀逸な作品である。(山畑信博)



優秀賞 歩行者優先の都市空間の形成

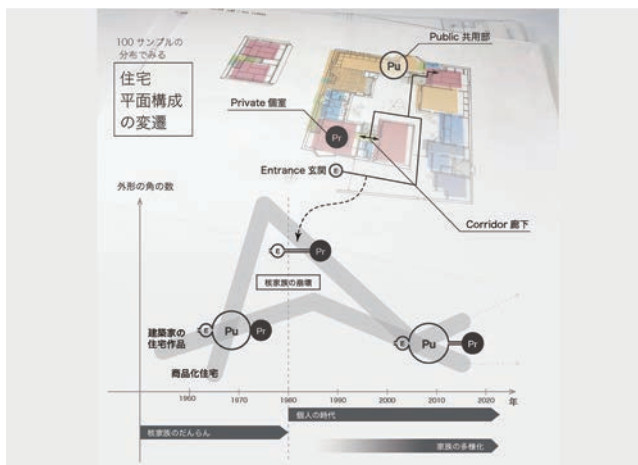
—大手門通りすずらん商店街の街路デザイン— 安部美希

これまでの都市空間は、自動車の大衆化と普及により自動車優先に形成されてきた。都市空間、いわゆる街路とは、人々が生活する上で欠かせない場所であり、人々優先の空間であるべきだ。コロナ禍において屋外活動の需要が増加し、車優先の街路空間を見直す大きな転換期にある。前述した通り、車優先の街路になっていることから、単なる移動空間として利用され、居場所としての機能が失われているのが現状である。日常生活を豊かにするためには、人々優先のスペースを最大限に確保し、沿道店舗の機能と街路上でのアクティビティを並行して考えることが最も重要である。沿道店舗に日常の目的を果たせる機能を持たせ、それらに付随させる形で街路の機能を充実させることで人々の生活空間が拡大し、より豊かになることが想定される。今後はさらに街路と建築双方を考慮した都市空間が求められるだろう。それらをより促進させるべく人々の目線に寄り添った研究を目指した。(安部美希)

講評

安部美希の作品は、山形市すずらん通りの外部空間を中心に、隣接する建物のリノベーションも含んだ、歩行者のためのまちづくりの提案である。アフターコロナのまちのあり方として、外部空間をどう使うかという点。また、最近のまちづくりの潮流として、道路を含めた外部空間を歩きながら過ごし、どう活かすことができるかというウォークアブルな町に対する期待。そのどちらにも応える意欲的な作品となった。まずは、車線を減らして自動車の交通量を減らし、歩道を広げ、様々な活動の場のきっかけとする。道路と連続して建物がリノベーションされることで、新しい活動の場を産んでいく。非常にシンプルで素直な案である。(竹内昌義)





### 優秀賞 住宅の平面構成に関する研究

—居室と通路による類型化と個室からみた考察— 菅原茉莉

経済や災害、高齢化や技術進歩などにより社会は変動している。私は、住宅が社会の変化に対応しているのではないかと考え、日本の現代住宅の平面構成についての研究を行った。調査には、戦後からの平面図を100個集め部屋を分類し、アプローチでみた共用部と個室の関係性をモデル化させた。研究対象は、既往研究になかった商品化住宅も加え、より普遍的な住宅の変遷が読み取れることを期待した。調査より、戦後当初の居間と個室が直接つながるものから、女性の社会進出を受け、居間を通らずとも個室へ入る間取りへと変化していた。その後、家族の多様化や個人単位での社会のつながりが増えると共に、居間を通り個室に入る間取りが増えている。また、商品化住宅は時代に関わらず外形が複雑である。近年において、デザイン重視の傾向にあるため再び外形は複雑化していることがわかる。住宅は外的要因により変化している。昨今のコロナ禍を経て、また新しいプランが生まれるだろう。(菅原茉莉)

#### 講評

菅原茉莉の卒業論文は、戦後の日本の住宅の平面をそれぞれの部屋の関係を抽出することで、時代の傾向とともに時系列に類型化したものである。玄関（アプローチ）からリビング、個室の関係を図にして表した。少しずつ世帯内の人数が減り、室数の変化がある。また、個室に至る経路もパブリックな居間を通るものが増えてくる。建築家による空間はよりダイレクトにリビングと個室がつながるものが多い。類似の研究は多くあるが、ハウスメーカーによるプランも同時に比較したことで、汎用的なプランと建築家のその対比、かたちに対するそれぞれの考え方の違いなどが明らかになった。(竹内昌義)

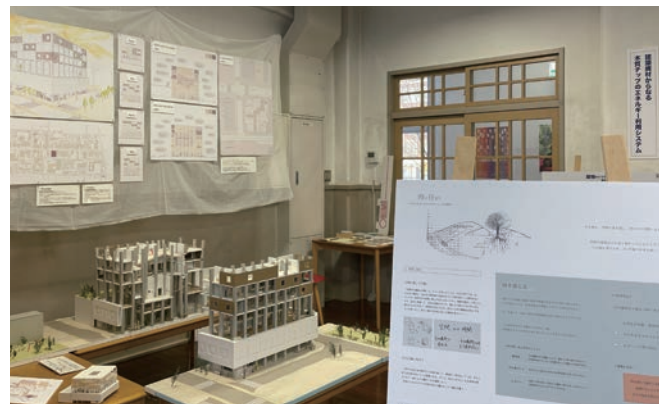


### 優秀賞 タイニーハウスの可能性 梅澤一燈

コロナ禍において、キャンプやタイニーハウスへの世間の関心が高まっている。それは、ホテル暮らしでは担保できない、住み手が空間を操作できる余白があるからだと考える。そこで、自分の好きな場所で好きな空間を作りながら生活をしたいという欲求を叶えるため、「Home Core（ホームコア）」と呼ばれるものと、それを設置する様々なフィールドを設計した。ホームコアとはインフラを詰め込んだ箱だ。20ftのコンテナと同じ外寸であり、トラックやトレーラーでの運搬が可能である。タイニーハウスやバンライフを楽しむ人々がホームコアと接続し集団生活を送る。またこのフィールドを全国に展開することで、ユーザーはフィールド間を自由に移動し、各フィールドの空き状況やチェックインをスマホで管理する。また、これらはイベントや移動型医療など多目的に活用することもできる。このような流れに付随し、建築をより身近なものにする様々なサービスや法整備が進んでいくと考える。(梅澤一燈)

#### 講評

梅澤一燈の卒業研究は、木造コンテナの組み合わせで住まいの可能性を考えた案である。通常、建築は専門家によってつくられるが、それを極限まで小さい単位にすることで、一般の住民がカスタマイズし、自由な暮らし方を実現できるようなシステムを考えた。街中の駐車場、大学近くの敷地、眺めの良い敷地などによって、組み合わせを変え、暮らし方のバリエーションが広がる。また、トレーラーなどで運ぶことができる大きさにし、使用料や運営方法まで提案している。実際のシステムにしても通用しそうな、リアリティーを合わせ持った魅力的な作品である。(竹内昌義)



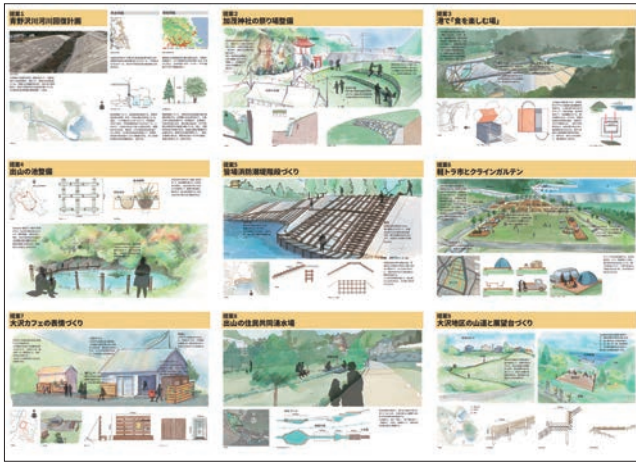
賞決めの審査会前のプレゼンテーションの様子（上左） 万全な対策のもと、2日間の一般公開を行った（上右）  
 嶋田洋平氏によるトークイベントの様子（下左） 「ニューノーマルなミライのかたち」有志による学外展示（下右）

本学の卒業制作は、現代の社会で起こっている様々な社会的課題に向きあい、時間をかけ検討し、解決策を模索する。建築やランドスケープという枠組みに拘らず、様々なテーマに取り組む。本年の最優秀は、新田ゆいのバイオマスの利用における産廃チップの地産地消に関する論文だ。定量的な考察を経てまとめあげた力作である。個性的な作品としては、前田大和のゲームグラフィックにおける建築物のデザインに関する研究があげられる。ゲームに出てくる建物の起源を探し、その比較をするというもの。ゲーム中のCGは自由がゆえに場面のイメージをより効果的にするため工夫がされるが、全くのオリジナルのものではなく、必ず何かの引用また組み合わせ、あるいはデフォルメになる。現代的な論文であった。制作は公共空間や商店街の活用、廃業したデパートの活用の提案、新たな建築の可能性など多岐に渡る。今年度から卒業制作は本学ホームページ上でアーカイブされることとなった。ぜひ参照されたい。

コロナ禍で卒展が限定公開となったが、有志の学生が学び館で自主的に展示を行ったことは、作品が社会にどう捉えられるか学生自身の学びになったはずだ。同時に、その姿勢に賞賛を送りたい。（竹内昌義）

賞	氏名	作品名	分野
最優秀賞	新田ゆい	建築廃材からなる木質チップのエネルギー利用システム	論文
優秀賞	大室新	言葉から生まれる空間 —歌集「木のかをり」から読み解く情景の空間化—	設計
優秀賞	安部美希	歩行者優先の都市空間の形成 —大手門通りすずらん商店街の街路デザイン—	設計
優秀賞	菅原茉莉	住宅の平面構成に関する研究 —居室と通路による類型化と個室からみた考察—	論文
優秀賞	梅澤一燈	タイニーハウスの可能性	設計
奨励賞	國井由樹乃	自給的農家の実態調査	論文
奨励賞	大久保瀬奈	「ひらがなとくらす」 —ひらがなを空間に落とし込む—	設計
奨励賞	長利咲代子	19人のインタビューを通した、「思い出の場所の写真」の分析	論文
奨励賞	前田大和	ゲームグラフィックにおける建築物のデザインについての研究 —ゲームから見る未来の建築—	論文
奨励賞	今田ちさと	ふるさとで結婚式 —地域文化からみるコミュニティのつながり—	論文
奨励賞	荘司琴美	防衛省における公務員宿舍の研究 —陸上自衛隊陣地駐屯地を対象とした提案—	設計
奨励賞	近藤暉人	都市の中に	設計
奨励賞	澤野祐	未来につながる暮らし —まちと里山をつなぐ環境教育施設「BIOTOPE BASE」—	設計

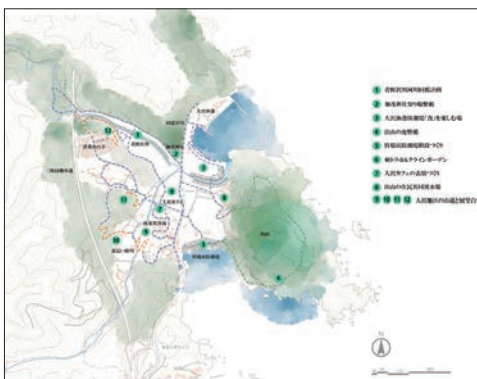




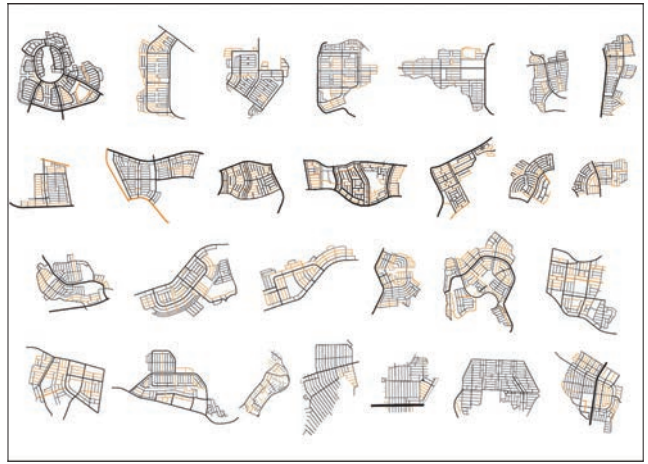
災害復興において被災者の精神的な癒しを形成する環境改善方法に関する研究 —気仙沼市大沢地区を対象として— 譚也

講評

本研究の焦点と課題は、ランドスケープデザインの主たる手法である空間デザインで被災地住民の癒しを達成できるか、それを検証できるかであった。故郷の風景やそこにあった大地との関わり、地域住民同士の関わりなど、暮らしの総体を失ったことに対して癒しをどう生み出せるかという問いである。対象地は本学科が東日本大震災以来支援を続ける気仙沼市唐桑町大沢地区である。譚也は災害発生から復興までの経過において時間が長い復旧復興期での心理的なケアと回復が大事であることを整理した。また、癒しの構造が複雑であるため、①災害から逃れる安全安心を確保すること、②生活や生業を回復し生きる原動力を得ること、③将来世代も含めその場所で生き続けられる希望を得られることを癒しの定義とし、それが得られるランドスケープ（大地、風景、そこにある環境）のデザインを生活者がとどのように関わられるかも含めて提案した。住民アンケートとフィールドワークに基づいた提案内容は力強く、説得力があった。（渡部桂）



癒しを形成する9つの提案（上）  
9つの提案の配置（下）



ニュータウンのリデザインのための街路網パターンの特性に関する基礎的研究 鈴木倭花子

講評

この研究はニュータウンの住みよさを、道路網の形態から評価することを目的としている。対象地域である仙台市の郊外に広がるニュータウンを調べてみると実に様々な道路網の形態が確認された。ニュータウンが造られ始めた1960年頃は十字路が中心だったが、近年はT字路の交差点が多く、より複雑な道路網となっている。本研究では道路網を様々な指標で計測し、道路網を区別する有効な指標として、「深さ」、「接続性」を特定しました。「接続性」は1本の道路に設置された交差点の数、「深さ」は外周の道路からある道路にたどり着くために何個の交差点を経由するかという指標である。つぎに選ばれた2つの指標と実際の空間体験の関係を探ることにより、この2つの指標が「危険性」、「安心感」、「集まりやすさ」などを表す指標であることを確認している。さらに2つの指標と実際の事件発生状況の関係を分析し、事件の発生確率と「深さ」、「接続性」が強い関係にあることを見出した。このような研究成果は他に例のないものであり、この研究成果を使えば、住みよさを客観的に評価することができる。（吉田朗）



街路網パターンを分析する図（上）  
パターン特性より、街の住やすさを評価する（下）



### 鮭川村空き家活用推進 旧牛潜小学校再生プロジェクト

鮭川村東部4地区の子どもたちが通っていた旧牛潜小学校は、村内の小学校統合に伴い、2011年3月で廃校となった。以降10年あまり、一部倉庫などとして使用されながら当時のままの姿を保っている。この校舎をコミュニティスペースとして再生させたいという地域の願いを実現させるべく、活用への第一段階として地域の方々のご意見をお聞きするヒヤリングと現況の調査を開始した。

コロナ禍中となったため、時期や方法を慎重に検討しながらの実施となった。まず2020年9月に廃校舎の現地調査と第1回ワークショップを実施。旧学区内4地区の区長さんや顔役の方々、そして本案件に主体的に関わっていただいている廃校時の在校生にご参加いただき、活用についてのご意見聴取と意見交換を行なった。廃校舎の活用については概ね賛成で、積極的な利活用のアイデアが交わされた。

2021年3月には、校舎の図面データ化と建物の破損状況の把握などのために、校舎の実測と細部の確認を実施。併せて、この場所が活用されている様子を具体的にイメージできるように仮設のカフェを教室内に設置して、配信用映像の撮影を行った。

空きインフラの活用には、その場所の持つ潜在的な魅力や可能性を社会実験により顕在化させ、地域の方々と体験を共有しながら求められる方向を模索してゆくことが大切だと考える。2021年度には、現地でもルシェを実施し活用の具体的イメージの実証実験を行いつつ、子育て世代や現役世代へのヒヤリングを検討している。併せて、これら社会実験の映像を配信することにより場所の潜在力を共有しながら、実現に向けプロジェクトを進めてゆきたい。(西澤高男)



### 只見駅周辺魅力化向上事業

只見町は福島県の奥会津に位置する自然豊かな町である。2011年3月の東日本大震災では直接的な大きな被害は無かったものの、同年7月の新潟・福島豪雨により只見川のダムが1つが故障し川が氾濫したことで、奥会津の生活と観光の要であったJR只見線の一部が被災し、小出一会津坂下間の113kmが不通となった。その後の復旧により現在は会津川口―只見間の27kmまでに不通区間が短縮され、2022年に全面開通が見込まれている。只見町は観光では登山等で賑わうが、只見川沿いを走る只見線自体が大きな観光資源になっており、全面復旧を沿線の市町村が待ち望んでいる。

JR只見線の復旧を前に、只見町は駅からほど近い縁結びで知られる三石神社の魅力向上を計画している。渡部研究室ではこの神社参道の調査と設計を行った。参道は図面も無いことから簡易GPSを利用した計測や、参道および只見駅から神社入口までの環境として歩行性や景観、植生等の調査を行った。これに基づき、様々な来訪者が安全安心に参拝できることを念頭に、当地の自然環境に配慮した近自然工法の考え方で参道の設計を行った。特に急傾斜箇所について、現地の水文環境に配慮し、人力で施工およびその後の維持管理が可能となるよう丸太と碎石による工法を選択した。

次年度は神社の管理を担う地区住民の方々と共に整備を実施する予定である。参道整備を行い、只見線復旧にともなう新たな来町者増を狙うところではあるが、同時に地区活動の強化、町民交流の活性、参道の整備や維持管理活動自体が観光資源、交流人口・関係人口の獲得になるよう、多重な意義を見込んで活動を継続する。(渡部桂)





### 大江町文化的景観建築実測調査

全国に70箇所ある重要文化的景観に選定された山形県大江町左沢地区で、最上川舟運の歴史を伝える町並みを維持する取り組みの一環として大江町からの調査依頼を受けたプロジェクトの一つ。令和2年7月28日の豪雨で、昭和42年の羽越水害並みの17.14m水位上昇となり最上川が氾濫、町内全域で55棟が浸水被害を受けた。町内百目木（どめき）地区では氾濫により、文化的景観の重要な構成要素となっている最上川沿いの町並みに建つ歴史的建築2棟が被災後に解体されることとなり、記録のための実測調査を行う運びとなった。志村研究室所属の3、4年生を中心に延べ6日に渡る実測作業が行われ、作図作業を進めた。O家は1階の背丈ほどまで水が上がり、構造的にも解体やむなしの状況となってしまったもので、被災家屋として町が解体する直前の緊急調査となった。元の所有者が畜産を営んでいたため、主屋の最奥部に家畜用の空間と餌の投入設備、専用の井戸等があった。

Y家蔵は、高齢女性の一人暮らし世帯で水害を機に、山形市内にお住まいの娘さんとの同居を決め、空き家となるため解体するという経緯であった。蔵は1階を収納、2階を座敷蔵として洪水にも配慮された構成を採っており、1階入口部分に洋風の装飾を施した珍しい蔵である。座敷内部の設えも質が高く、学生たちと感心し、盛んに惜しいと所有者さんにその価値についてお伝えしていたが、ある日やはり惜しいと共感された所有者さんが、自ら蔵の譲渡希望者を探し出し、一転解体は取りやめとなるというハプニングがあった。業務としての実測は不要となってしまったが、記録のため作業は続投することとした。歴史的な建築物に対する評価と対話が結果的に保存に役立ったことは何より嬉しい成果であった。(志村直愛)



### 早戸温泉環境整備実習

福島県三島町早戸地区には2010年から通い実習を重ねてきた。2011年は3月の東日本大震災に加え7月には新潟・福島豪雨があり、遊歩道も被災した。それでもその復旧・復興を兼ねた遊歩道整備が継続されてきたが、今回の新型コロナウイルスは人が集まり交流することを阻み、ついに合宿による実習は断念せざるを得なかった。しかし我々にはこの実習を今後も継続したい思いがあり、地元早戸地区の皆さんからも継続のご要望をいただいた。それを受け今年度はコロナ禍の状況でもできることを続けることになった。

三島町は奥会津に位置しているが通信環境は整っている。そこで早戸地区住民、活動を支援していただいている佐久間建設工業、学生、実習講師、教員によるオンラインによるミーティングを3回開催した。互いの現状報告をしながら遊歩道の課題や合宿中の滞在先としてきた早戸地区本村の課題を伺い、課題解決のためのディスカッションを行った。遊歩道は、近自然工法で施工を行ってきたことから植物の成長が旺盛で、利用に即した草刈り等の維持管理をどのようなレベルで行うかが課題であった。教員や実習講師からは植生の観察に加え現植生に配慮した外来種の選択的除草を行うことや、作業効率と歩行空間領域の明確化を兼ねた除草が提案された。さらに遊歩道利用の潜在的な需要を掘り起こすためにもサイン計画の助言もなされた。また、本村集落では獣害や背後地の人工林の倒木があることなどが報告され、野生動物誘引の原因となる果樹や茂みの伐採、スギ人工林の間伐や一部伐採が提案された。これら提案に基づき地区独自でも早戸地区環境整備を進めて行く準備が進められた。次年度は合宿を伴わない活動も計画し、教育と環境整備と人的交流を継続していきたい。(渡部桂)



### 湯野浜温泉エリアリノベーションプロジェクト

コロナで大打撃を受けた庄内の温泉地、湯野浜温泉。震災の頃、客室を学生たちとリノベーションした縁もあり、このピンチに再び地域再生に関わることになった。鶴岡市、湯野浜100年株式会社、本学がコラボレーションする産官学連携プロジェクト。

課題が数多くあった。団体から個人へと旅のスタイルが変化、今後想定されるリモートワークへの対応、地域のアイデンティティをどのように共有するか。ここでは、10年後の湯野浜温泉の理想の風景を描き、関係者と共有することで新たな具体的なプロジェクトを始めるきっかけをつくることが求められた。

湯野浜温泉エリアリノベーションは、旅館で働く人々のためのシェアハウスとして空き家を再生したり、地形を生かして海辺に露天風呂を計画したりと、地域の資産を生かした空間を学生たちとともに企画、提案を行った。エリアリノベーションとは、小さなまちの変化を点、それらを繋げ、面にしながらエリア全体を段階的に変えていく手法。その中で、アフターコロナのための客室リノベーションや、海辺の産直などは実施に向かって走り始めている。学生たちは、現地のリサーチから、旅館経営者へのヒアリング、企画立案やCG作成などの表現、そしてリモートでのプレゼンテーションまでを一貫して行った。地域が抱える課題とどう向き合うか、リアルに感じながら試行錯誤をする貴重な体験だったと思う。(馬場正尊)



旅館経営者へヒアリングを行う



### 西澤高男准教授特別講義「地域と共につくりながら考える」

任期満了により2020年度で退職された西澤先生の最終講義である。西澤先生にはプロダクトデザイン学科で5年、本学科で9年、計14年の間、本学にてご指導をいただいた。建築家として設計事務所を主宰されているが、大学では当初プロダクトデザイン学科での実験的なアートやパフォーマンスの実践に取り組み、本学科に移られてからは、地域の課題に対し建築や空間の提案を行いながら、実際に学生と作っていくという実践に魅力がある。赤湯にある葡萄畑の急な斜面に、建築の杭工事で使う大きなドリルのようなものを用いてデッキを設置したり、レゴブロックのような木の箱を組み合わせて駅のベンチや家具を作ったりと、必ずそこにはスケールの違う建築や家具の技術の応用がある。それぞれのプロジェクトでは、学生が活躍するのも特徴だ。長期間の合宿や何度も現地に通うことで、学生のスキルや取り組みの精度も上がっていく。地域の人たちもこの情熱で取り組まれたら、自然と協力してしまうだろう。こういうプロジェクトは潤沢に予算があるわけではない。何をするのが最も効果的か、その中で学生と何ができるか、それをどう作るか、複雑な条件を整理して、情熱を持って淡々と実行する。西澤先生のこれまでの活動を通じて、実践型のプログラムだと感嘆した。次の場でも頑張っていたいただきたい。また、時々帰ってきてアドバイスをいただきたい。(竹内昌義)



特別講義の様子





### 環境的未来型 馬場未織氏

前期の環境的未来型は初のリモート開催となった。コロナ禍で人々の暮らしや働き方の価値観が変わりつつある中、南房総と東京、地方と都市を移動しながら2拠点居住をされている、南房総リパブリックの馬場未織氏に、お互いの良さを感じながら実践されてきた生活について伺った。未来における「資本」とは何か、その一つは里山という自然そのもの。それらをどう未来へ繋げていけるか、興味深い内容であった。(竹内昌義)



### 環境的未来型 秋吉浩気氏

秋吉浩気氏が率いるVUILDの活動や作品から、学生たちは建築の未来を感じただろう。日本中の森林の現場をネットワークし、地域の人々とショップボットを共有しながら共に空間を作っていく姿勢。設計だけではなく、流通を整えることで建築の作り方を変えること。知識や技術を公開し、共有することで素人でも空間作りに関わりやすくする仕組みを作ること。今までの建築業界にはなかった発想ばかり。新たな建築が生まれるときは、新たな技術や手法がある。それを実感した、とても刺激的なレクチャーだった。(馬場正尊)



### ワンデイプロジェクト 山代悟氏

2020年度のワンデイプロジェクトのゲストは、近年、中大規模都市木造建築の設計や技術開発を積極的に行っている芝浦工業大学教授・ビルディングランドスケープ共同主宰の山代悟氏。「CLTと丸太でつくる空間 一木でつくる懐かしい未来」という、CLTを用いて大学の中に居場所をつくるという課題は、ワンデイプロジェクト始まって以来の「素材」をテーマとしたものであった。

講評会に先立って行われたレクチャー「木でつくる懐かしい未来」では、CLTやLVLといったエンジニアリングウッドの可能性や中大規模木造建築のつくりだす未来像についてわかりやすく解説いただくとともに、日本の建築現場や林業の置かれている状況、頻発する災害に対する市民防災の取り組みなど、多岐にわたる知見が併せて紹介された。地域の問題を考える機会の多い本学科の学生たちにとって共感する点の多いレクチャーであったことだろう。

最優秀賞となった鈴木雄大の案は、大きな樹木を取り巻くように配置したCLTの床と壁によって、隣人との距離感をとりつつ空間の抜け感を操作するというもの。空間構成とプレゼンテーションの完成度が評価された。(西澤高男)



最優秀賞「抜け感」鈴木雄大

## コンクール等受賞者の紹介



優秀賞「津然一体 一重なる歴史と路」大室新

### JIA東北建築学生賞

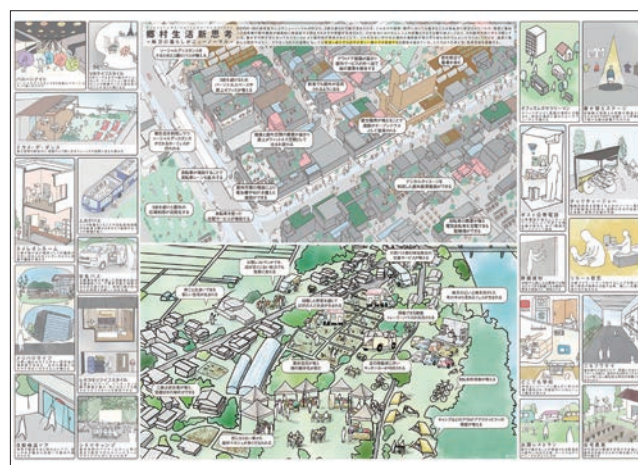
主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

- \* 優秀賞「津然一体 一重なる歴史と路」大室新
- \* 奨励賞「集合住宅革命」三富俊

毎年行われているJIA東北建築学生賞で、大室新が優秀賞、三富俊が奨励賞を受賞した。大室新の作品は、2019年度の3年次演習「大規模建築を考える」での作品。山形駅西口の現在、県民ホールが建つ敷地に、そのオルタナティブとしてのビルディングタイプの提案を含めた課題で、彼の実家の生業である製材所とそれを見学する複合施設を提案した作品であった。三富俊の作品は、2020年度の3年次演習「リノベーション演習」での作品。自宅から半径200mの範囲で課題となる空間を見つけ、その空間を含むエリア全体をリノベーションするというもの。彼の作品は、学生アパートの駐車場に、街路的な空間を巡らし新たなクリエイティブの場として提案している。どちらも課題の想定を超えた良い作品であった。(竹内昌義)



奨励賞「集合住宅革命」三富俊



浅子佳英賞「郷村生活新思考」

### 「アフターコロナの世界」コンペティション

主催「アフターコロナの世界」コンペティション実行委員会

- \* 浅子佳英賞「郷村生活新思考」

小笠原一穂 張樹存 熊谷遥奈 村山綾音 三富俊 佐藤優衣

学生が応募した「アフターコロナの世界」というコンペティションへの作品である。都会ではなく、地方でのアフターコロナの生活を提案した。アフターコロナはどんな社会だろうか。「密を避け、ある程度の距離を保ち、インターネットなどを使って対面のリスクを軽減する。」単純にいうとそういうところだろう。コロナという感染症があったから、そうなったのかもしれないが、地方での暮らしというのはもともとそのようなものではなかっただろうか。コロナの流行によって、本来はもう少し先に実現するものが突然、必然となってしまったのではなからうか。そう考えるとデメリットばかりではなく、メリットも見えてくる。したたかに生きていくために、常に上を向いて絵を描くことが大切だと思う。(竹内昌義)

### 芸術工学会奨励賞

主催 一般社団法人 芸術工学会

- \* 奨励賞「建築廃材からなる

木質チップのエネルギー利用システム」新田ゆい

### 建築新人戦

主催 建築新人戦2020実行委員会

- \* 100選「庭と家」熊谷遥奈

### せんだいデザインリーグ2021

主催 仙台建築都市学生会議

- \* 100選「都市の中に荒野をつくる 一気ままな「場」を目指して」近藤暉人



## 執筆活動



農山漁村文化協会  
2021年1月  
ISBN 978-4-540-18162-7

### 研究者が本気で考えたゼロエネルギー住宅

—断熱、太陽光・太陽熱、薪・ペレット、蓄電— 三浦秀一

私が10年住んでいる自宅の経験とデータ、いろんな人から投げかけていただいた疑問と失敗をもとに、これからの住宅に必要なとなることを、できるだけ住み手の感覚として分かるように書いた。感覚という意味では、冬の暖かさ。断熱で冬の世界は変わる。エネルギーをゼロでなくでもいいと思う人もいるかもしれないが、実はそれほど難しいことではなく、これからの家には必須条件になってくる。そのために必要な断熱の話と、薪やペレットの話と、太陽光、蓄電のことまで分かる唯一の本である。(三浦秀一)



学芸出版社  
2020年12月17日  
ISBN 978-4-7615-2762-4

### テンポラリーアーキテクチャー —仮設建築と社会実験—

馬場正尊 加藤優一 瀧下まり 菊池純平 木下まりこ

不確実性が高まる都市の未来だからこそ、いきなり建物を建てず、仮設建築でその場所の可能性を顕在化したり、社会実験で人々を巻き込み、その先に建つ建築への共感を集めるような手法が求められているのではないだろうか。この本では、国内外の事例を取材し、テンポラリーアーキテクチャーのデザインから実現するための技術や手段、そしてクリアすべき法制度等をまとめた。個人や小さな組織でも参加できる、民主的な未来の都市の風景のためのガイドブック。(馬場正尊)

東北芸術工科大学 デザイン工学部

## 建築・環境デザイン学科 年報2020

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2020

発行日 2021年7月31日

編集 佐藤充 大場いおり

構成 倉地亜希子

書式设计 株式会社GKグラフィックス

印刷 田宮印刷株式会社

製本 田宮印刷株式会社

発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科  
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail [env.info@aga.tuad.ac.jp](mailto:env.info@aga.tuad.ac.jp)





東北芸術工科大学

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

E-mail [env.info@aga.tuad.ac.jp](mailto:env.info@aga.tuad.ac.jp)